



特集「戦争と環境」の編集にあたって

戦争はいうまでもなく最大の環境破壊であり、平常時でなく戦時であるからこそおこなわれる軍事行為が、環境と人間に計り知れない甚大な被害を与える。さらに戦争に関連する平常時の活動が環境問題を生じさせ、また戦後、新たに出現する急激で広域的な環境問題もある。たとえば、基地や軍事演習問題、スペースデブリ、ベトナム戦争の枯葉剤使用、湾岸戦争の劣化ウラン弾使用、地雷処理、国際テロ行為などにより、深刻な環境問題が生じ、大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、生態系破壊、遺伝的影響、温室効果ガス排出による気候変動にともなう環境変化等々、さらにはそれらの結果生じる貧困や難民発生のように、その影響は多様であり広範な領域に及んでいる。また、一方でこれらの環境問題に起因して食や水の供給が不足するなど環境資源が劣化することにより、社会秩序が乱れてさらなる紛争の連鎖が生じるケースも多い。

21世紀に入っても、戦争、テロなどはとだえることなく、地政学的リスクは世界各地で高まりつつある。さらに、かつて人類が経験したことのないような大規模な自然災害、新興感染症などとの遭遇も加わって、世界秩序は流動化し、グローバル・セキュリティが脅かされているのが現状である。食料問題、水、資源、エネルギー問題などに起因する紛争も各地で多発し、貧困、エイズなど問題複合体を生じさせている。米同時テロから5年たった現在の状況を「世界大戦前夜」だとする論壇すら現れはじめた。今こそ、戦争と環境の密接なつながりを解きほぐし、従来の国家安全保障の概念から、人間安全保障や環境安全保障といった枠組みでグローバル・セキュリティを論じ、客観的な実情の調査と具体的な行動シナリオの提案が求められているときはないだろう。

以上の視点から、本号ではこれまで当センターで編集されたことがなかった特集テーマである「戦争と環境との関わり」を正面からとりあげることにした。そこで、このテーマについての論文を各方面から調べてみたところ、この分野の研究はまだあまり多くおこなわれていないことに改めて気がつかされた。そういえば環境問題を論じた国際会議や研究集会において、「同時代に進行する戦争行為と環境影響との相関関係や環境安全保障の枠組み」が明示的に議論されたことはないのではないだろうか。本特集では、この困難な課題設定に対して、幸いにもこの分野に言及されている気鋭の研究者に意欲的な論文を5編、ご寄稿をいただくことができた。

特集では、戦争や地域紛争の原因となる、食糧、水資源、エネルギーなどの問題をとりあげ、戦争や軍事行為が及ぼす直接、間接的な環境破壊の実態とその波及的影響を、イラク戦争やコートジボワール内戦、横田基地環境問題などを例に実証的に報告されている。そして、京都議定書の取り組みなどの地道な努力の効果と、戦争による環境被害の大きさを対比しながら、戦争は最大の環境破壊であるという認識をいま一度喚起し、平和で持続可能な社会や経済の実現をめざすための体制のあり方、法的枠組み、金融投資行動、ガバナンスと市民参加の役割など、広範な研究課題が展望される。エネルギーや水、鉱物資源の賦存量の地図や紛争地域図、貧困マップなど各種の主題情報を表現した複数の世界地図と環境問題発生地域図を重ねて見ると、その連関関係があらためてクローズアップされる。本特集では、そのような連関関係を示す環境情報を総覧するまでにはいたらなかったが、この特集を契機にして今後さらに戦争と環境のかかわりを明らかにし、環境安全保障の枠組みに関する研究が活発になることを期待したい。

(編集委員 福井弘道)